

近世ユーラシア大陸の威信言語研究にもとづく「東洋学」の再構築

研究代表者 緒形康（神戸大学大学院人文学研究科教授）

共同研究者 伊藤隆郎（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

真下裕之（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

村井恭子（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

【研究の目的・方法】

19 世紀の西洋に確立した「東洋学」は、近世ユーラシア大陸の漢語、ペルシア語、アラビア語等の「威信言語」に基づく文献学を中心としている。ここに威信言語と総称したものは、政治権力の強制によることなく地域文化圏の形成を可能にするアウラを有した言語である。これらの言語が通用した文化圏は、その威信性を温存したまま、書記体系を離れた記号学的な共通言語へと内部再編された漢語やアラビア語文化圏のようなケースと、言語の威信性が植民地化の危機の中で消滅し、在来言語、英語等の新たな共通言語が誕生したペルシア語文化圏のようなケースとの2つに類型化される。本研究は、近世ユーラシア大陸において威信言語が果たした役割に注目しながら、過去の「東洋学」を多角的に再評価し、21 世紀の新しい学問体系として、それらを再構成する手掛かりを得ることを目的にしている。

エドワード・サイード『オリエンタリズム』の刊行以後、「東洋学」は厳しい批判にさらされ、もはや「東洋学者（オリエンタリスト）」と何のためらいもなく自称する者はまずいないであろう。しかし、既に指摘されている通り、サイードはじめ「オリエンタリズム」批判者たちの論難を免れるべき業績も少なくない。また、「東洋学」の学説史や事典の類は多いが、いずれも研究者列伝という性格が強く、羅列的もしくは物語的な記述にとどまっている。「東洋学」を多角的に再評価し、21 世紀の新しい学問体系として再構成するためには、過去の研究成果に見られる「オリエンタリズム」的傾向をあげつらって事足りたりとしたり、あるいは羅列的・物語的に記述したりするのではなく、それら各々を客観的に精査することが不可欠である。

本研究は、16～18 世紀のミッション関係資料を主な分析対象とし、漢語、ペルシア語、アラビア語による威信言語の古典群を西洋の宣教師たちがどのように研究したかを明らかにする。近代において、アジア各地で組織的に行われた「他者」への働きかけは、当事者たちの目的意識にかかわらず、東洋学の重要な一部をなしている。ミッションという目的意識のもと、まとまって生み出された彼らの資料群は、アジア各地域の個別研究ばかりで

なく、東洋学全般の特質を明らかにする上でも、絶好の材料を提供してくれる。共同研究は、ミッション活動が果たした東洋諸言語にかかわる学術研究がどのように「東洋学」という学域の形成をもたらしたかに関する基礎資料（資料記事目録・文献目録）を整備することを最終目的とするが、本報告は、共同研究の過程で明らかになった、過去の「東洋学」の諸相について論じてみたい。

【研究の成果】

1. オリエンタリズム再考の再考：オリエンタリズム研究の動向と展望

エドワード・サイード『オリエンタリズム』の原著が刊行されたのが1978年であるから、今から35年前のことになる。その後同書は、サイードが対象としたアラブ学、イスラーム学、中東研究にとどまらず、人文・社会科学の広い分野に多大な影響を与え、その影響は今も続いている¹。

「東洋学」の再構築を目指すプロジェクトの一環として、ここでは、まず『オリエンタリズム』に始まるオリエンタリズム研究の最近の動向を瞥見し、次にそれらの中でも特に注目すべき一論文を取り上げ、今後の研究の課題と展望を探ることとする。

サイードの『オリエンタリズム』は刊行以来、賛否両論、毀誉褒貶、多くの議論を呼んだが、東洋趣味の文学や絵画、あるいはオリエントに関する一般的なイメージなどを扱ったものではなく、学術的なオリエンタリズム（東洋学）を主な対象とする研究についていえば、最近では、同書の抱える問題点を踏まえてオリエンタリズムを改めて検討する動きが主流となっているように思われる。

例えば、『オリエンタリズム』に対する真っ向からの反論として書かれたものに Irwin 2006 がある²。著者ロバート・アーウィンが『オリエンタリズム』が「私には、単なる間違いと意図的な虚説を区別するのが難しい、悪質ないかさまの書に思われる」[Irwin 2006: 4] といい、オリエンタリズムを帝国主義の覇権的言説とするサイードの見解に疑問を呈し、オリエンタリストたちを突き動かしていたのは支配欲やイデオロギーなどではなく知的好奇心であったこと、彼らの多くが自分たちの調査・研究対象にむしろ好意的であったことを示す。

個々のオリエンタリストに関する専論も著されている。例えば、コーランを初めてフ

¹ 『オリエンタリズム』の影響については、同書の日本語訳（サイード 1993）に付された杉田英明、今沢紀子の解説に簡潔にまとめられており、古くはなつたが、参考になる。

² 同書はアメリカでは、*Dangerous Knowledge: Orientalism and Its Discontents*, New York: Overlook Press 2006 と別タイトルで出版されている。

ランス語に訳したことで知られる André du Ryer (1580-1660)については Hamilton/Richard 2004、後に触れる John Selden (1584-1654)と Abraham Ecchellensis (1605-1664)についてはそれぞれ Toomer 2009 と Heyberger 2010、サイドが非難したオリエンタリストの 1 人 Ernest Renan (1823-92)については Deth 2012 があり、専論ではないものの Dew 2009 の多くのページが *Bibliothèque orientale* (東洋全書) の著者 Barthélemy d'Herbelot (1625-95)に割かれており、またオリエンタリストとはいえないかもしれないがペルシア旅行記の著者として知られる Jean Chardin(1643-1713)については羽田 1999 がある。

アーウィンも述べているが、これまでに指摘された『オリエンタリズム』の問題点のうち主要なもののひとつは、サイドの批判を免れるべき、あるいはサイドの批判があたらない研究者や業績が多数あるにもかかわらず、それらを彼が考慮しなかったというものである。中でも、ドイツの東洋学をほとんど無視したことは大きな問題とされた³。『オリエンタリズム』以後、ドイツの東洋学に関する本格的な研究が現れるのは 2000 年代に入ってからのものであるが、最近 Marchand 2009 と Wokoeck 2009 というまとまった成果が得られた。同様に重要でありながら、サイドがほとんど言及しなかったロシアの東洋学やオリエンタリズムについても、Schimmelpenninck van der Oye 2010 (シンメルペンニク=ファン=デル=オイェ 2013)、Tolz 2011、Kemper/ Conermann 2011 などが相次いで刊行された。

このように『オリエンタリズム』の問題点を踏まえつつ、オリエンタリズムを批判的に再考する動きに棹さすのが、*Zeitsprünge* の 2012 年特集号 (16-1/2) “Orientbegegnungen deutscher Protestanten (ドイツ・プロテスタントのオリエンタ邂逅)”に収められた 5 論文である。そのうち筆者の関心を最もひいたのが、以下にその概要を紹介する Jan Loop, “Die Bedeutung arabischer Manuskripte in den konfessionellen Auseinandersetzungen des 17. Jahrhunderts (17 世紀の宗派間論争におけるアラビア語写本の意味)”である⁴。

³ サイド自身、当初この問題点をよく自覚していたようであるが、後に書かれた「オリエンタリズム再考」では「例えば、私がドイツのオリエンタリズムを考察の対象から除外したという批判の場合、それを私が含めるべきであったとする根拠を示した者は誰一人いなかった」として、そのような批判が「率直に言って、私には表面的で瑣末なものに思われたし、真面目に答えることさえ無意味なことと感ぜられるものである」と述べる [サイド 1993: 上, 50-55, 64-65; 下, 295]。しかしながら、ドイツの東洋学が無視し得ない重要性をもつことは明白である。例えば、シンメルペンニク=ファン=デル=オイェによって次のような指摘がなされている。「サイドの議論の中心は、学問と植民地主義が協調して動くという考え方である。しかしながら、東洋学派の黄金時代には、ドイツの近東における植民地的関心は、取るに足らぬものとみなされがちであった。ドイツ人にとっては、東方に関しては、知と権力の間に本質的つながりは明らかに無かったのである。これは、ロシアにとっても同様に重要な点である。なぜなら、特に東方に関心をもつ学者たちは、ドイツの学界から多大な影響を受けていたからである」[シンメルペンニク=ファン=デル=オイェ 2013: 21; Schimmelpenninck van der Oye 2010: 8]。ただし、ドイツにおける学問と植民地主義の関係については異論もある [Marchand 2009: xix]。

⁴ その他の収録論文は次の通り。Alexander Schunka, “Die Konfessionalisierung der Osmanen. Protestantische Berichte über den Orient im ausgehenden 16. Jahrhundert”, pp. 8-46; Markus Friedrich, “Türkentaufen. Zur theologischen Problematik und geistlichen Deutung der Konversion von Muslimen im Alten Reich”, pp. 47-74; Asaph Ben-Tov, “*Sudia orientalia* im Umfeld protestantischer Universitäten des Alten Reichs um 1700”, pp. 92-118; Dietrich Klein, “Ein Goldenes Kalb in Rom. Jakob Georg Christian Adler (1756-1834) und die Drusen im Fokus deutscher Orientalistik”, pp. 119-144.

ロープが取り上げるのは、詳しい内容はともかく、それ自体は比較的良好に知られた論争である⁵。それは、イギリスの John Selden が 1642 年に、アレクサンドリア総主教 Eutychius、別名 Sa'īd b. Baṭrīq (877-940)⁶ のアラビア語史書の一部をラテン語訳と注釈つきで刊行したことによって始まった。そのテキストには、最初アレクサンドリアに総主教 (Patriarch) とともに 12 人の長老 (Presbyter) が任命され、総主教が死んだ後には長老たちが自分たちの中から次の総主教を選んだこと、そしてその後長老たちの権限は司教 (Bischof) に移ったが、第 11 代総主教までは司教はいなかったことが記されていた。この記述はカトリック教会の位階制を論駁する根拠となるものであり、そのために Eutychius の歴史書を利用した 1 人がスイスの改革派 Johann Heinrich Hottinger (1620-67) である。彼はまた、聖書の言葉であるヘブライ語の神聖性を主張する立場から、ヘブライ文字の母音符号が後代の発明ではなく最初から存在したことを間接的に裏づけるものとして、母音符号のついたアラビア文字で書かれた古いコーラン写本の断片に注目し、その複製をつくらせたりもした。一方、彼らを批判したマロン派の Abraham Ecchellensis は、Eutychius の歴史書の記述について、Selden の解釈および訳を誤りとし、他のアラビア語写本などを援用して、アレクサンドリアの管轄区には常に司教がおり、叙階権 (ius ordinandi) は彼らに保持されていて長老に委譲されたことはなかったと主張した。かくしてロープは、この論争でアラビア語写本が大きな役割を果たしたことを確認し、こうしたヨーロッパにおけるキリスト教の宗派間論争がアラビア語写本の収集と研究、そしてアラブ学発展を促す要因のひとつであったと結論する。

Loop 2012 が興味深いのは、オリエンタリズムが中東に対するヨーロッパの支配的な立場の強化ではなく、ヨーロッパ内の問題の解決を目指すものでもあったことを示しているからである。

ところで、ロープは Ecchellensis が Selden や Hottinger よりも優れたアラブ学者であるといい [Loop 2012: 89]、Eutychius の歴史書の件の記述については Ecchellensis の解釈の方が正しいと示唆しているようである。Abraham Ecchellensis (Ibrāhīm al-Ḥāqilānī) は、現在のレバノンの生まれであり、アラビア語の能力は Selden や Hottinger よりも高かったかもしれない。また、彼の方がより多くのアラビア語資料を利用できる立場にあったことも確かである。しかしながら、Eutychius の歴史書のアラビア語校訂テキストを見ると [Cheikho 1906-09: I, 95-96]、Selden の解釈の方が自然に思われる。Al-Maqrīzī (1364-1442) も Selden と同様に理解したようである [al-Maqrīzī: IV, 975/ II, 484]。ただし、

⁵ 例えば、フュック 2002: 64-65, 72-73 でも既に言及されている (フュック 2002 の原著の出版は 1955 年)。

⁶ この人物の経歴については、Breydy の記述が最も信頼できる (cf. Breydy 1985: I, vi-ix)。

話はこれで終わらない。実は件の箇所は、Euty chius によるものではなく、後世の加筆だったらしいのである [Breydy 1985: I, ix, xii-xiii, 53 n. 12]。したがって、この問題はさらに検討を要するが、それについては他日を期したい。

2. 威信言語と翻訳の政治学

オリエンタリズムを批判的に再考するには、アーウィンもいうように、学術的なもの（東洋学）とそれ以外のものを分けるのがよいと思われる。東洋学の功罪を再検討し（第一段階）、その上で、東洋学と東洋趣味の文学や絵画、一般のオリент（アジア）・イメージ、対外（植民地）政策などとの関係が改めて問い直されるべきであろう（第二段階）。このうち第一段階にあたるのが上で挙げた諸研究であり、同様の研究をさらに進めることが、「東洋学」の再構築にとって、まずは必要であろう。

このような学術的なものとしての「東洋学」の功罪を明らかにする上で、16 世紀以来、東洋の地で布教活動を行ったミッション宣教師の翻訳が持つ意味を再考することは大きな意味を持つ。16-17 世紀の中国における事例からそのことを考えてみたい。

イタリア人 Nicolas Longobardi、龍華民(1559-1654)と言う中国名で呼ばれたイエズス会宣教師は、1609 年にマテオ・リッチを継いで、北京にてイエズス会の中国教区長となったが、リッチのような順応主義(adaptation)に批判的だった彼は、後に典札問題と称されることになるキリスト教・儒教間の教義論争を惹起し、中国におけるキリスト教弾圧の端緒を開いた。にもかかわらず、20 年に及ぶ中国での布教生活の中で優れた中国語力を身に付けた彼は、中国における最初のキリスト教聖人伝の翻訳者という栄誉を担った。その書物は、スペイン語から中国語へ翻訳されたカトリックの聖人伝である『聖若撤法始末』（韶州刊本 1602 年、閩中天主堂本 1645 年）に他ならない。

同書の原著は『バルラームとヨサファト』(Barlaam and Josaphat)であり、ブッダをモデルに、ヨサファトが数々の試練を乗り越えてカトリック教徒へと成長する物語であった [Ikegami 1999]。『バルラームとヨサファト』は John of Damascus によって 7 世紀に編集されたものだが、10 世紀にグルジア語で執筆された *Balavariani* によって広く流布し、1048 年のラテン語版にてヨーロッパに広く流布した。この物語を詩劇に表したスペイン人 Lope de Vega の *Barlaan y Josafa* を始め、多くのヴァリエントが存在する。夙に上田敏が「菩薩物語由来」という文章で注目したように [上田 1985]、こうした書物の歴史そのものが、キリスト教と仏教の聖人像が相互補完的に構成されたことを雄弁に語っているが、西洋においては『バルラームとヨサファト』が持っていた東方の色彩は努めて軽微に扱われた。しかし、東洋において事情は全く異なる。

すでに、この翻訳がなされる直前、日本では最初の活字本である『サントスの御作業のうち抜書』が1591年に出版されていた〔福島 1979〕。この日本文ローマ字本の原典の1つは、1275年にラテン語で編集されたヤコボス・デ・ヴォラギネ(Jacobus de Voragine)の『聖人伝』(Aurea Legenda)であったが、『バルラームとヨサファト』の物語は、この『聖人伝』にも収められているから、16～17世紀の東アジアは、ミッションとの文化衝突の最初期において依拠する文献を共有していたことになる。両者の翻訳や編集過程の異同は、「東洋学」の検証にとって重要なテーマとなり得るだろう。

だが、ここでは、中国における『バルラームとヨサファト』の運命に注目したい。李爽学は、Longobardi (龍華民)による同書の翻訳に、言葉の優れた意味での「政治学」を見てとっている〔李 2011: 144-152〕。

それを象徴する言葉は「顛倒錯乱」である。この言葉は、「小鳥の説教」の挿話に登場する哀れな愚か者を、偶像を崇拜する最大級の異端者として描く際に用いられた訳語だが、原著にはこれに対応するものはない。しかし、このLongobardi (龍華民)による造語である「顛倒錯乱」は、カトリック信仰における真と偽の判断基準として、マテオ・リッチの『畸人十編』(1608年)で取り上げられて以来、中国キリスト教の教義の根幹を表す言葉として今に至っている。また、「四つの箱」の挿話は、ボッカチオの『デカメロン』やシェークスピアの『ヴェニスの商人』にも取り上げられる広く流布した物語だが、Longobardi (龍華民)は、ここに『使途行伝』の死神を登場させることで、ボッカチオやシェークスピアが世俗化しようとした物語を再びキリスト教神学の磁場へと回帰させた。

Longobardi (龍華民)の翻訳の政治学は、西洋が『バルラームとヨサファト』の中から消去しようとした仏教の表象を拡大し、ヨサファトの物語をカトリックと仏教との間に闘わされた宣教の物語として描いた。ヨサファトの改宗を阻もうと彼を宮廷に幽閉した国王バルラームの従者は、国王が王子を閉じ込める原因を「天主経を決して聴かないように、信奉する仏像を捨てないように仕向けているのです」と説明するが、ここに「仏像」が言及されるのは明らかに不自然で、この件はキリスト教の「聖像」であるべきである。Longobardi (龍華民)は、仏教徒の国王とカトリックの王子をテキストに導入することで、『バルラームとヨサファト』を仏教に対抗するカトリックの教義闘争の物語としたのである。中国における初めてのキリスト教聖人伝の登場は、仏教からの改宗を説くカトリックの宣教を隠蔽したテキストであった。さらに、同書において、カトリックの絶対神が「皇の皇、主の主」と表現されたとき、儒教文化は初めて『創世記』の超越神を理解することが可能になったと言い得る。ヨサファムは25歳にして王国を譲り、

35 年後、「羽化飛翔して去る」。その死後、「天主を宣揚し、天主教を賛美する」奇跡が起こった。現在に至る中国の土着キリスト教がこうして誕生した。

『聖若撒法始末』の書物としての運命も、そのテキスト自身が内包する以上のような翻訳の政治学と並んで数奇なものであった。それは、広東の韶州において 1602 年に刊行されたとある。確かに、Verhaeren の書誌情報によれば、同書は北京北堂図書館に所蔵されていると言う〔李 2011:140〕。しかし、そこには刊行年も頁数も記されず、入館あるいは入華の時期さえ明らかではない。李は、この蔵書本は、『聖若撒法始末』の刊行から 20 年後に、イタリアのイエズス会宣教師である Alfonso Vagnoni(中国名は高一志 1566-1640)が別に翻訳したものではないかと疑っている。だから、確認し得る最古の『聖若撒法始末』の版本は 1645 年の閩中天主堂本なのである。その刊行には、やはりイエズス会宣教師であった Giulio Aleni(中国名は艾儒略 1582-1649)の福建における精力的な布教活動が大きかった。当時の福建・広東地域は明朝の亡命政権の拠点であったことから、『聖若撒法始末』に色濃く漂う仏教への執拗な攻撃は説明できるかもしれない。フランチェスコ会やドミニコ会が地域の基層組織に分け入り、貧民救済や医療援助といった慈善活動に努めていたことも、『聖若撒法始末』などの聖人伝の流通を促進することに寄与した〔崔 2007: 119-134。張 2007: 115-126〕。同時代の日本における『バルラムとヨサファト』の関連書である『サントスの御作業のうち抜書』に仏教色が希薄であることは、この 2 つの翻訳書が置かれた地域的アイデンティティーの相違を物語るものである。

『聖若撒法始末』を始め、その宣教イデオロギーを一般化したマテオ・リッチの諸著作が翻刻・再版されるブームは、清末の 1880 年代に訪れる〔鄒 2011:144-152〕。その際、16~17 世紀のイエズス会宣教師たちが生み出したキリスト教に関する翻訳語が、漢語の語彙に改めて編入され、新時代のメディアを通じて流布されることで、威信言語としての漢語の地位を更に強化したことは言うまでもない。Longobardi (龍華民) の翻訳の政治学に見られた世界観やイデオロギーの領域に関わる知の組み換えは、近代以後の中国における「東洋学」の性格を大きく規定することになったのである〔Collani 2011〕。

3. 東洋学の源流としてのキリスト教ミッション

1788 年 2 月 2 日、カルカッタに本拠を置く東洋学の研究団体、ベンガル・アジア協会の創立 3 周年を記念して、総裁ウィリアム・ジョーンズ William Jones (1746-94)が行った講演は、近代的な比較言語学あるいはインド学の始まりを告げる画期のひとつとして夙に知られている。このことをもって、彼を東洋学の開祖の一人と数えることに、異論を唱える者はいないだろう。

ジョーンズの多岐にわたる東洋学研究のうち、見落としてはならないのが、近世ペルシア語（以下、「ペルシア語」とする）とペルシア語文芸に関する著作である。とりわけペルシア語文法書は、1771年に出版されたあとに幾度も版を重ねたことからわかるとおり、その後の欧州におけるペルシア語の学習・研究に多大なる影響を及ぼした。

ムガル帝国時代にペルシア語が南アジアの政治・外交・文化の諸分野で果たしてきた重要な役割を考慮すれば、18世紀末の南アジアで活動した東洋学者がペルシア語とそれを媒体とした文化的所産に注意を払った理由は明白である。たしかにジョーンズの文法書は、学術的な探究というより、東インド会社社員のペルシア語習得という実用的な目的のために執筆されたものであった。

しかしペルシア語やペルシア語文芸に対する近代的な研究が、イランではなく南アジアで始まった事実は、南アジアにおけるペルシア語の通用と、南アジアに何らかの利害と関心を有する欧人の存在という二つの条件が、濃密に重なり合う特有の状況が存在したことを示している。ペルシア語にかかわる東洋学の所産がこのように当初、南アジアに淵源を有したことは、決して不思議なことではないだろう。このことを裏付ける事実は、ジョーンズの研究にとどまらない。例えば、のちにイラン史研究の開拓者となるジョン・マルコム John Malcolm (1769-1833)がイラン渡航以前にハイデラーバードでペルシア語を学んでいたことや[Hamilton: 848b]、イラン学、インド学の祖にしてペルシア語写本の収集にも功績を残したアンクティル＝デュペロン Abraham Hyacinthe Anquetil-Duperron (1731-1805)が渡航先のポンディシェリでペルシア語を習得したこと[Deloche et al. 1997: 89]、「ウパニシャッド」の最初の欧語訳として名高い彼のラテン語訳⁷が、ムガル帝国時代に作成されたペルシア語訳を底本にしていたこと、などを挙げることができる。

さて、ペルシア語学という東洋学の一部門を成立させた二つの条件、すなわち南アジアにおけるペルシア語の通用、および南アジアに何らかの利害と関心を有する欧人の存在が、同時に成り立ち得た状況は、近代以前にも見いだすことができる。16世紀以降に南アジア各地でキリスト教諸派が行ったミッション活動において生み出された威信言語研究、文献研究の所産がそれである。近代以前の南アジアにおいて政治的・文化的威信をまとっていたペルシア語と、これを明敏に覚知したキリスト教のミッション活動との交錯に、19世紀以降に発展する東洋学の水脈の一つを探り当てることができる。

ポルトガル王国によってインド航路が開発された後、早くもカブラル Pedro Álvares Cabral 指揮下の第2回船団（1500年出航）には、数名のフランシスコ会士が同行して

⁷ A. H. Anquetil-Duperron, *Oupnek'hat, id est, Secretum tegendum*, 2 vols., Argentorati, Parisiis, 1801-02.

いた。1502 年に出航したヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama 指揮下の船団にはドミニコ会士とフランシスコ会士が同行しており、1503 年に完成したコーチンのポルトガル要塞で最初のミサを挙行したのは、ドミニコ会士であった。1533 年に設置が決定されたゴア司教区が、司教の選任を得て実質的に成立したのは 1537 年のことであるが、このとき司教に任じられてゴアに赴いたのは、フランシスコ会士ジョアン・ダルブケルケ João d'Albuquerque であった。1534 年に設立されたイエズス会に属するフランシスコ・ザビエル Francisco Xavier (1506-1552) がゴアに到着するのは、1542 年 5 月のことである[Neill 1984: 113-118]。

以上の通り、16 世紀前半に本格的に始まった南アジアのミッションは多様な教派によって担われていたが、その間、彼らが現地のインド諸語をいかに学んだか、またキリスト教の教理や典籍の内容をいかにして伝えたかについて、情報は乏しい。1542 年から 1544 年にかけて南インドの漁夫海岸で布教活動を行ったフランシスコ・ザビエルは公教要理を、現地に通用するタミル語（ザビエルは「マラバル語」と記す）に翻訳している[河野訳 1: 179]⁸。このタミル語訳は現存していないので、その内容をつまびらかにすることはできないが、その典拠になったのが、ポルトガル領アジアの歴史書『アジア史』*Década da Ásia* やポルトガル語文法書を著した人文学者バロス João de Barros (1496-1570) の公教要理⁹であったことは疑いない。

インド諸語の公教要理や文法書・辞書などの作成は大略、次の通りである¹⁰。インド諸語の公教要理のうちで最も早いものとして知られる、ローマ文字タミル語公教要理がリスボンで出版されたのは 1554 年のことである。また 1558 年、ゴア近郊の村で発見された「マラーティー語」の書物複数をポルトガル語に翻訳した例があり、その写本は今日、ローマのイエズス会文書館およびエヴォラの公共図書館に所蔵されているという[Wicki 1975: 23-26]。一方タミル語の文法書としては、イエズス会士エンリケス Henrique Henriques (1520-1602)によって 1566 年に完成したものがあるが、これが印刷に付されることはついになかった。タミル文字タミル語の公教要理は同じエンリケスの翻訳によるものが 1578 年にクイロンで出版され、翌 1579 年にはジョルゲ Marcos Jorge (1524-71) 編の公教要理を底本とした別内容のものが同じエンリケスの翻訳によってコーチンで出版されている。さらに 1586 年にはやはりエンリケスの翻訳によるキ

⁸ 以下、タミル語に関する文献については[Županov 2005: 232-258]。

⁹ *Grammatica da lingua portuguesa com os mandamentos da sanda mãe igreja*, Lisboa, 1539. 本書は前半がアルファベットと綴り字の規則に割かれ、後半が読本 (cartinha) の形式による公教要理である。詳しくは[Boxer 1981: 82-85]。

¹⁰ ミッション関係の一次文献については二点の基礎的な書誌目録がある[Streit 1928], [de Backer & Sommervogel 1890-1932]。また南アジアのみならず、アフリカ、ブラジル、中国、日本で行われたイエズス会の出版物に関しては、丸山徹氏の総覧が便利である[Maruyama 1996]。また 16-17 世紀のポルトガル領インドにおける出版物に関しては、現存しないものも含めた一覧が作成されている[Boxer 1975]。なおこの論文は[Boxer 1956]の増補版である。さらに[Priolkar 1958]は古いですが、なお参照の価値あり。

リスト教聖人列伝のタミル文字タミル語訳がプニカレで出版された。タミル語に関しては以上の他、イエズス会士プロエンサ **António de Proença (1625-66)** によって作成されていたタミル語・ポルトガル語辞書が、その死後 1679 年に南インドのアンバラカットで出版されていることを挙げるに留める。ただ、その著者プロエンサが、イエズス会の傑出した宣教師ノービロ **Roberto Nobili (1577-1656)** の主導のもと、南インドのマドゥライ地方で行われたミッション¹¹に参加する中でこの著作をものしたことは留意に値する。

南インドの西部沿岸で通用するコーンクニー語（ないし「マラーティー語」）に関しては、1590 年代から 1600 年代にフランシスコ会士が聖人列伝を翻訳し 1607 年に出版されたものがあるが[Meersman 1960: 44-45]、後世によく知られることになったものとしては、イエズス会士ステファンス **Thomas Stephens (1549-1619)** によるものを挙げるべきだろう。彼の著作になる「マラーティー語」（おそらくローマ文字）の教理書が 1616 年にゴア近郊のラーチョールで出版された記録があるが、これの現物は伝わっていない。ステファンスの業績で現存しているのは、当人の死後 1622 年にラーチョールで出版されたコーンクニー語の公教要理¹²と、原著への増補改訂を経て 1640 年にラーチョールで出版されたコーンクニー語の文法書¹³である。この増補改訂を担った者の一人がイエズス会士リベイロ **Diogo Ribeiro (1560-1633)** であるが、彼はこれに先立つ 1626 年にコーンクニー語・ポルトガル語辞書を編纂している。ただしこれは出版には至らず、手写本が伝存するのみである¹⁴。

以上のごとく、キリスト教ミッションは当初、自らが到達した地域の現地語に主たる関心を寄せた。これに対してサンスクリット語によってキリスト教の教理を記述する試みは当初は見られなかったし、サンスクリット語の文法を欧人が最初に体系的に記述したのは、はるか遅く 17 世紀の半ばにイエズス会士ロート **Heinrich Roth (1620-68)** が行ったものが最初である¹⁵。インド文明の威信をまとった言語に対する働きかけが比較的

¹¹ ノービリに関しては[Bachmann 1972]があり、マドゥライ・ミッションに関して、簡単には[重松 1979:]があるが、その他、おびただしい数に上る関係文献については、[Županov 1999] および [Županov 2005] のほか、[de Silva 1987: 209-210]および[Ponnad 2001]の参考文献目録から遡及できる。

¹² *Dovtrina christam em lingoa bramana Canarim*, Rachol, 1622. この版本の写真版に解説を付したものが[Saldanha 1945].

¹³ *Arte da lingoa Canarim composta pell Padre Thomaz Estevão da Companhia de Iesvs & acrecentada pello Padre Diogo Ribeiro da mesma Cōpanhia e novemente revista, & emendada por outros quatro padres da mesma Companhia*, Rachol, 1640. これを再版したものが[da Cunha Rlvra 1857].

¹⁴ 本書の写本の所在が、ゴア中央図書館[Scholberg 1982: 265]、ゴア大学図書館ピッスルレンカル博士旧蔵書コレクション[Shastri & Navelkar 1989: ii, 5] のいずれであるか、判然としない。ピッスルレンカル **Panduronga Sakharam Shenvi Pissurlencar (1894-1969)** はポルトガル領インド史の研究者であり、ゴア歴史文書館の館長も務めた。本写本のゼロックスコピーがミネソタ大学の **Ames Library of South Asia** に所蔵されており、この写本をもとにしてピッスルレンカルが作成したタイプ原稿も存在する。この写本を底本に、このタイプ原稿を参照しつつ作成された翻刻本が[Maruyama 2005].

¹⁵ ロートの文法書については、その手写本の写真版が出版されている[Camps & Muller 1988]。ロートとその業績については他に[Hauschild 1972], [Filliozat 2011].

遅れたことは、インド側がこれを他者に対して秘匿しようとした要因を別とすれば、欧人の関心のこのような傾向に原因を見いだすべきだろう。

これに対して、本稿が取り扱う、南アジアのミッションによるペルシア語への翻訳や言語研究は独特の位置を占めるものである。すなわち、それが行われた時期は16世紀末から17世紀初頭であって、上記の概略がカバーする時代にほぼ並行している点でサンスクリット語と異なる。一方、ペルシア語への取り組みは、ペルシア語の当事者からの働きかけに応じた、いわば受動的なきっかけによって始まったという点で、タミル語やコーンクニー語の場合と事情を異にするのである。そのペルシア語の当事者とは、16世紀後半以降、北インドに覇を唱えつつあったムガル帝国と帝王アクバル Akbar（在位1556-1605）であった。

わずか13歳で即位したアクバルは、1560年に後見役の貴族を排除して帝国の実権を掌握した後、1562年、南方に位置する中部インドのマールワール地方を制圧し、1568年にはチトール、1569年にはランタンボールと、首都アグラの南西方面に向かうルート上の戦略拠点を次々と陥れた。そして1572年11月には西部インド沿岸部のグジャラート地方に親征し、これを併合することによって、アクバルはついにインド洋西部への通路を獲得した。翌1573年2月、グジャラート地方遠征の総仕上げとして、最大の港市スーラトの砦を攻囲するアクバルの軍営にポルトガル領インド総督は使者を送った。インド洋海上ルート的一大拠点を遂に手中にしようとする北方の大帝国の動向に、ゴアの政庁が無関心であったはずはない。懇ろな贈り物を携えて到来した異国の一団に、アクバルはポルトガルをはじめとする欧州の事情を熱心に尋ねたという¹⁶。

一方、キリスト教ミッションと帝国との最初の接触は、次のような経過をたどった。東部インド、ベンガル地方の港市フーグリーに駐在していたポルトガル人司令官タヴァレス Pietro Tavares はアクバルに招かれてその宮廷に滞在していたが、その仲介によって、ベンガル地方のサトガーオンに赴任していた聖職者ペレイラ Gil Eanes Pereira が1578年3月、新都ファトゥプルの宮廷に到着した。ペレイラは公教要理注釈やキリスト伝などの書物をアクバルに講じ、自らに帯同させたアルメニア人をペルシア語通訳として用いたようである。ペレイラ自身はイエズス会士ではなく、ドミニコ会に関係を持っていたらしいが、自らの説明に関心を寄せてさらなる説明を求めるアクバルに対しては、ゴアのイエズス会神父たちがより高い学識を備えていると伝えたという¹⁷。

¹⁶ [AN: III, 27]. ムガル帝国の対ポルトガル、イエズス会関係については、[Maclagan 1932]が一次資料に基づく概観を提供してくれる。また[Gulbenkian 1980]の詳細な考証も参考になる。

¹⁷ ペレイラに関しては、[Gulbenkian 1980: 202-04].

Pereira の一連の行動がアクバルにどの程度作用したのかは判断できない。しかし 1578 年から、アクバルの新たな文化政策が表面化するのには確かである。すなわちファトゥフプルの宮廷の一角に設けられた「信仰の館」と呼ばれる建物を会場に、1578 年後半以降、アクバルの臨席のもと、諸宗教・諸宗派の代表者たちによる宗教談義が断続的に行われるようになったのである。さらに 1579 年 9 月にはこの新政策の背後にいたとおぼしき思想家 Šayḥ Mubārak の起草になる帝権論が公布されたあと、同年 11 月には、帝国の宗務行政の長官職 (šadr al-šudūr) などの要職を歴任し、上記の動向に批判的であったと目されるムスリム保守派の代表者 2 名が失脚して、両名ともどもメッカ巡礼という所払いに処されるに及んだ。アクバル自身はあくまでムスリムであり続けたが、諸宗教・諸宗派の教説が帝王の前で戦わされるという、従来にないリベラルな文化状況が現出しつつあったのが、1570 年代末の帝国宮廷の状況であった。1578 年 12 月にアクバルからゴアにキリスト教聖職者の派遣を要請する書簡が発送されたのは、まさにこのような文脈の中にあつたのである。

ポルトガル語訳で伝存するゴア宛の書簡によると、この際アクバルから要求されたのは、キリスト教の典籍の招来、およびペルシア語に通じた人物の帯同であった。1579 年 11 月にゴアを出発して 1580 年 2 月にファトゥフプルに到着した第 1 次ミッションは、アクアヴィーヴァ Rodolfo Acquaviva (当時のイエズス会総長クラウディオ・アクアヴィヴァ Claudio Acquaviva (任 1581-1615) の甥)、モンセラテ António de Monserrate¹⁸、エンリケス Francisco Henriques の 3 名から成っていた。このうちエンリケスはペルシア湾の港市ホルムズ出身のイラン人改宗者であり、当然ながらペルシア語を解した。前節の末尾で述べたとおり、ペルシア語に対する南アジアのキリスト教ミッションの働きかけは、このようにムガル帝国の新たな文化政策から生まれた要請に応じて始まったのである。なおこのミッションは、アントワープのプランティン印刷所 (Christophe Plantin) で 1567-1572 年に刊行された 8 巻本多国語 (ヘブライ語、カルデア語、ギリシア語、ラテン語) 聖書¹⁹を携えていた。この点でも、ゴアのミッション関係者はアクバルの要請に忠実に対応したことになるのだが、実際アクバルがアクアヴィヴァらに求めたのは、ペルシア語の翻訳だった (1580 年 7 月ファトゥフプル発の書簡でアクアヴィヴァは、アクバルが福音書をペルシア語に翻訳するよう求めたことを伝え

¹⁸ モンセラテはゴア管区長に送った書簡の他に、第 1 次ミッションの記録をラテン語で残した。1583 年 5 月にゴアに帰着するまでの克明な見聞記は、アクバル時代に関する外部者の観察としてきわめて重要な資料である [MLC]。

¹⁹ *Biblia Sacra Hebraice, Chaldaice, Graece & Latine: Philippi II. Reg. Cathol. pietate, et studio ad sacrosanctae excud.*, Antwerp, 1569-1572.

ている²⁰。この要求にミッション側が応えられるのは、後述するとおり、第3次ミッションを待たねばならなかった)。

アクバルが再度送った招請に応じてゴアを出発した第2次ミッションは1591年、この帝王が滞在していたラホールに到着した。レイタン Duarte Leitão を団長とし、デ・ラ・ヴェーガ Christóbal de la Vega、リベイロ Estevão Ribeiro から成るこのミッションは、ほどなく帰還した。あまりにも早いその帰還の理由は、今のところはっきりしない。

さて本稿の主たる関心であるペルシア語に対する働きかけが行われたのは、1595年5月、ラホールのアクバル宮廷に到着した第3次ミッションである。その構成員は、ジェロニモ・ザビエル Jerónimo Xavier (1549-1617)、ピニエイロ Manuel Pinheiro (1556-1619)、ゴイス Bento de Góis (1562-1607)であり、その後1600年にコルスィ Francesco Corsi (d. 1635)が、1602年にマチャード António Machado が、1610年にデ・カストロ Giuseppe De Castro (1577-1646) がそれぞれミッションに加わった。

このミッションの団長であるジェロニモ・ザビエルは、フランシスコ・ザビエルの甥に当たる人物の息子として生まれた(以下、フランシスコと区別して、J. ザビエルと記す)。1581年末、ゴアに到着した後、グジャラート地方の港市バッセイン、南部インドの港市コーチンの学院の院長を務め、1592年からは、イエズス会ゴア管区の中で管区長に次ぐ地位である、ゴアの Professed House の上長の地位にあった²¹。

アクバルの招請を受けて組織されたミッションは1594年12月にゴアを出航した。グジャラート地方の港市カンバーヤトに上陸した一行は同地にしばらく滞在し、この間J. ザビエルはペルシア語の学習に取り組んだ。彼らが、ラホールに営まれていたアクバルの宮廷に到着したのは1595年5月5日のことである。これ以降、J. ザビエルは1614年夏頃に帝国の首都アグラを去るまで、帝国の宮廷で様々なミッション活動に取り組んだ。帝王アクバルにあらためて示唆されて取り組んだペルシア語の習得もその一部をなす。

その滞在中、J. ザビエルとその仲間たちは、帝王アクバルの死去(1605)とジャハーンギールの即位という王朝の画期を目撃したばかりでなく、その前後に生じたこの父子の確執、この王位継承の際に生じた派閥闘争など、ムガル帝国側の史料からは十分にうかがえない動向をつぶさに観察している。さらに、その時期に帝国宮廷に到来した英国人たちとの軋轢は、カトリックとプロテスタントとの対立を反映するものであり、宮廷

²⁰ [Correia-Afonso 1980: 68]. ゴア管区長に宛てたこの書簡でアクアヴィヴァは、ポルトガル本国にアラビア語版の福音書を手配するよう、依頼している。

²¹ J. ザビエルについては[Camps 1957]が詳細かつ網羅的な成果であり、[Maclagan 1932], [Gulbenkian 1980] の他、新出の[Calvalho 2012] の当該箇所も参照すべきである。

における J. ザビエルたちの行動を従来以上に難しいものにした。第 3 次ミッションはこのように、様々な意味において、時代の転換点の中で行われたものだったのである。

その詳細は、J. ザビエルと彼のミッションの構成員がゴア管区長、イエズス会総長などに送った報告書簡²²、これをもとにしたグズマン Luis de Guzman およびゲレイロ Fernão Guerreiro の編纂資料²³によって知ることができる。これらの史料群は、この第 3 次ミッションばかりでなく、上記の通り重大な事件が続発したムガル帝国の状況を知る上でも、きわめて重要な情報を提供してくれる。

4. 「東洋学」再構築の歴史的検討——景教研究からみる「東洋学」

中国唐王朝へのキリスト教伝播に関して、17 世紀前半(明末)に西安で発掘された徳宗建中二年(781)の紀年のある「大秦景教流行中国碑」(以下「景教碑」)および 20 世紀初頭(清末)に敦煌莫高窟藏経洞から見つかった敦煌文書が想起される。とくに「景教碑」は、当時中国にいたイエズス会士らによりヨーロッパに紹介され、一躍注目の的となったことは有名である²⁴。さらに最近では 2006 年に洛陽から唐の文宗大和三年(829)の紀年の入った「大秦景教宣元至本経」の景教経幢が発見され、話題となった²⁵。

とりわけ明末の西安における「景教碑」発見は、その直後より碑文の翻訳や宗教的内容・景教の歴史的状況などについて多くの研究・学術的活動がなされるきっかけとなった。またこれとは別に、17 世紀に始まる景教研究のあり方そのものを問う研究も行われている。これらの研究の多くはキリスト教宣教師をはじめとする 17 世紀から現代に

²² 書簡の現物はイエズス会ローマ文書館などに残されているが、散逸したものについては、これらの書簡をもとに編集された手写本資料や印刷物によって補うことができる。報告書簡の印刷物に関しては、Maclagan, *The Jesuits*, pp. 11-16 を見よ。また第 3 次ミッションに関しては、ゴアの文書館に伝来した文書群の一部から成る写本が重要であり、J. ザビエルなどの書簡など、並行する史料から得られる情報の欠落を補完してくれる(British Library, Add. 9854, Add. 9855)。これは、英国の東洋学者でマレー語辞書 (*A dictionary of the Malayan Language*, London, 1812)、マレー語文法書(*A grammar of the Malayan language, with an introduction and praxis*, London, 1812)を出版したことでも知られるマースデン William Marsden (1754-1839) の膨大な蔵書に属したものである。Add. 9854, Add. 9855 については、[Philippis & Beveridge 1910], [Boxer 1949] が概略を示しており、Add. 9854 については翻訳が出版されている[DUC: III, 1-291]。

²³ 両名がそれぞれ著したイエズス会布教史は、第 3 次ミッションに関する書簡資料の欠落を補う重要な一次史料である。グズマンの布教史[Guzman] (初版本の影印復刻が天理図書館善本叢書洋書部 (Classica Japonica) の 1 つとして 1976 年に出版されており、筑波大学附属図書館のベッソン・コレクションに属する版本が全文公開されている (<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tree/besson.php>) は 1599 年までの事績を載せており、ゲレイロのそれはそれ以降に関する記事を載せる(1601 年から 1608 年までの記事が 2 年分ずつ、1603 年から 1611 年にかけてエヴォラないしリスボンで都合 5 巻にわたって出版された。これを集録・翻刻したのが[Guerreiro])。なおムガル帝国に対するミッションの資料としては、C. H. Payne による 2 つの翻訳書[Payne 1926], [Payne 1930] がしばしば用いられるが、前者は、グズマンとゲレイロにもっぱら依拠して執筆されたデュ・ジャリク Pierre du Jarric のイエズス会布教史 (*L'histoire des choses plus mémorables advenues tant es Indes Orientales que autres par's dela decouverte des portugais en l'establissement et prograz de la foy chrestienne et catholique*, 3 vols., Bordeaux, 1608-14) からの翻訳であるから、いわば二次的な史料の翻訳にとどまることに留意すべきである (後者はゲレイロの布教史からの直接の翻訳として使う価値がある)。

²⁴ この碑は 20 世紀初頭にデンマークのジャーナリスト Frits V. Holm が買収しようとしたが失敗し、精巧なレプリカを作成してそれを持ち帰ったという事件があったが、これを当時中国訪問中の桑原隲蔵が目撃し、その状況や景教碑について記している[桑原 1910]。また[礪波 2010: 9-10] 参照。

²⁵ 洛陽での景教経幢出土の状況については[葛: 2009: 1-4]と所収の[洛陽市第二文物工作隊 2009]および[礪波 2010: 11-12]、[森部 2012: 352] 参照。

至るまでの神学者・キリスト教徒の布教活動に関連する。周知のようにこれは中国の植民地化に関わる問題であり、近年ではサイードの『オリエンタリズム』(1978)の影響を直接的・間接的に受けた研究もみられるようになった。以下に、こうした研究を参考に、景教遺物をめぐる布教と翻訳を含む学術活動の状況およびそれに関連する諸問題を確認・検討し、「東洋学」の再構築へ向けてその手がかりを探っていきたい。

「オリエンタリズム」の問題を明確に掲げた研究として、景教研究の根柢にあるイデオロギーを考察した[デーク 2007]が挙げられる。デークはまず、景教研究者を①中立な意味での東洋学者・専門家(歴史学者あるいは言語学者)と②もっとも広い意味での神学者(伝道学に従事する人)という二種類に分け、両者の研究レベルの顕著な格差を指摘する。そのうえで神学者による「景教碑」碑文の読み込みの方法から、西洋自身の宗教の優越性を過去のアジア文化のなかに探そうとする姿勢について考察する。

デークが注目するのは20世紀前半に景教研究に従事した日本人キリスト教牧師の佐伯好郎(1871-1965)である。佐伯は「景教碑」碑文および敦煌文献を初めて完全に英訳した人物である。この英訳が長い間、西洋言語における景教遺物に関するほぼ唯一の情報源であったため、これを参考として西洋の神学者による研究や再翻訳が行われた(しかもそれは近年でもみられる)。しかし佐伯は、漢語で書かれた原典²⁶を言語学的考察によらず、きわめてキリスト教的な「希望的観測」から無理な同定や歪曲を行ったのであり、例えば「阿羅本」を「アブラハム」、「序聴迷詩所経」を「イエス・メシア経」とするなど、「(漢語)文献からキリスト教的内容を取り出す」ことを行ったのである。そしてこれらの同定・解釈は、神学の手引き書や西洋文献において共通見解となり、さらにはキリスト教が「(唐代中国の)大乘仏教に影響を与えさせた」などの誤った見解を生むという影響をもたらしている。

こうした奇妙なキリスト教化による唐代景教文献の歪曲は、佐伯に限らず、明清期のキリスト教宣教師をはじめ二十世紀の神学者の翻訳作業にも容易に見出せるものであった。これらの活動の動機は、政治的・文化的に最高潮であった唐代中国に正統のキリスト教が、ゆがんだ形であれ、すでに存在していたことを証明すること、または、キリスト教が中国の宗教に深い影響を与え、中国においてキリスト教という至高の信仰に改宗することはまさしく正当な帰結であり、こうした企てには唐代にすでに前兆があったのだと(布教の正当性を)示すことだった。

²⁶ 東洋学者による認識では、唐代における景教は布教のために儒教・仏教・道教の要素を取り入れており、「景教碑」の漢語表現はそれらの術語表現が多分に使用されている[森安 1982: 266-267]、[栄新江 2007: 428-430]。

これらの考察の末に、デアークは唐代景教文献の将来の研究のために必要なこととして、専門家の成果とそれらの文献を教会史研究のための資料に用いること、そして佐伯の結論からさらに結論を引きだそうとする種類の神学者との間のギャップを埋めることを挙げる。

つぎに、時期を遡り、明清期のキリスト教宣教師およびその周囲の人々の「景教碑」に関わる状況についてみていく。宣教師たちが中国での布教活動において唐代景教文献を利用したことは上述のデアークをはじめすでに多くの研究者により指摘されている²⁷。NICOLINI-ZANI 2009 は「景教碑」碑文翻訳において①イエズス会・②プロテスタント・③比較文化・④道教という4種のアプローチを指摘し、とくに「景教碑」発見直後もっとも早く、かつ大きな影響力をおよぼしたイエズス会の翻訳活動をめぐる状況について詳細に考察する。

「景教碑」の発見はイエズス会にとって保守的な中国人を改宗させるための、またヨーロッパにおける自らの地位を強化するための絶好の好機であった。こうした状況のもとに、イエズス会士と中国人キリスト教徒(改宗者)は、唐代のキリスト教を自分たちのカトリックミッションの明らかな祖先であると強調する形で翻訳・布教活動を行うのであるが、NICOLINI-ZANI はこの当時の中国人キリスト教徒の反応を特記している。すなわち、マテオリッチらによって中国にもたらされ、当時「天学」の名称で知られたカトリック信仰と景教とをまず最初に同一視したのは李之藻であった。こうした同一化の影響として、その後(清代)、多くの中国人が「景教後学」の名称を受容し、「景教徒」となり、さらには福建にあったいくつかの教会が「景教堂」と名称を改めるに至ったという。この他、イエズス会に接近した明末中国の知識人(文人)層の詩の分析を通じて、彼らが唐代のキリスト教を、数百年を通事でも伝えられてきた古くかつ敬うべき宗教的伝統の始祖として理解していたことを指摘する。

一方、17世紀におけるイエズス会士の活動についてはすでに多くの研究があるが、NICOLINI-ZANI は未だ触れられていない活動として「第二の景教碑」作りを指摘する。これは西安地区における布教のためにやってきたポルトガルのイエズス会士が1644年に立てた記念碑としてのカトリック版レプリカである。大きさは「景教碑」よりも小さいが形状は大変よく似ており、その文面も「景教碑」が漢語文にシリア文字が挿入されているのと同様に、漢語文にラテン文字が挿入されていた。さらにその文面も対応しており、例えば「景教碑」が「於是我三一分身，景尊彌施訶，戢隱真威，同人出代」と記すところをイエズス会士の碑は「於是 天主大發仁慈，戢隱真威，同人出代」と記す。

²⁷ 「景教碑」に対する各宗派の認識・反応については[Glen2013: 429-432] 参照。

ここから NICOLINI-ZANI は「景教徒」の経験はイエズス会の布教戦略によって確かな方法で承認され、かつ利用されたのだと指摘する。しかしこのレプリカに漢語を使用した点から見れば、イエズス会側から「景教碑」漢語碑文への擦り寄りがあったともみなせるのではないだろうか。

デークは、研究の前提条件（研究者の立場や動機）を探究することの重要性を説き、神学者による景教遺物の翻訳活動におけるイデオロギーを暴いて見せた。ただし、デークは専門家と神学者というカテゴリーのみで分類したため、西洋人とアジア人（宣教師と改宗者）との間の、景教遺物の翻訳活動の動機や目的における相違については明確に触れられていない。

NICOLINI-ZANI の研究は、基本的にイエズス会士が布教の戦略として、景教をカトリックと同類のもの・祖先であるという認識をヨーロッパおよび中国に広め、さらにこの認識がさまざまな影響をもたらしたことに重点を置くものである。しかしその一方で、中国人キリスト教徒の景教という名称の受容や、カトリックを景教の名でもって中国既存の宗教として受容したこと、またイエズス会士が模造したカトリック版レプリカの石碑の文面における「景教碑」の漢語碑文への擦り寄ったともみなせる状況が存在したと示されている。これらはイエズス会の所謂「適応主義」にとどまらない漢語の象徴性・威信性の問題としても扱えないだろうか。またアジア人による「オリエンタリズム」の受容と再生産をただの西洋の偏見の裏返しとみるだけではなく、彼ら自身の戦略を具体的に跡づけることも必要だと思われる。

最後に、キリスト教布教活動に対するアジア側の反応の一事例として、清末（光緒年間）の広雅書院に属した知識人朱一新による景教研究を考察する張淑琼 2007、同 2008 について紹介したい。広雅書院は洋務運動を推進した張之洞によって設立された人材育成のための書院である。朱一新は景教をゾロアスター教とするなどの誤りもあったが、広く漢籍史料・西洋の文献・以前の宣教師等が中国語で書いた文献を渉猟し、それらを比較・考証し、景教がカトリックではないことを主張した。さらに西洋の宗教・学問が中国を発祥とするという「西学中源」説を唱えた。この主張の背景には、天津教案などにより外国人宣教師やその信徒と在地の中国人との対立が顕著になった状況が存在し、朱一新は愛国心から外国に抗するためにこの説を提唱したのである。しかし広雅書院があった広東は早くからイエズス会による布教が行われ、多くの中国人が景教とカトリックを同一視するなかでこの主張を行った点、また、中国の文献だけではなく西洋学術の知見も取り入れた新しい学術活動の契機を生み出した点で注目される。

景教研究に限って言えば、「オリエンタリズム」を意識した研究は、デークなどのように西洋の研究者の内省的な仕事によるものがほとんどであり、中国・日本人研究者の

反応は未だ薄いように思われる。デークも中国研究者の成果を西洋言語で利用可能にすべきと述べているように²⁸「東洋史」の再構築には各研究者の認識の共有と歩み寄りが必要ではないだろうか。

【まとめに代えて】

東アジアと西南アジア研究は、共にユーラシア大陸を対象にしながら、大学や研究所における研究制度として別個のディシプリン・領域の中で議論されてきた。威信言語や共通言語に関する考察についても、その例に漏れない。本研究は、こうしたアジア研究における地域やディシプリンの分断性を統合し、「東洋学」を総合的に再検討することを目指した。

翻って見れば、「東洋学」は、ヨーロッパが「アジア」を外在化し、他者化するための体系であった。この点で「東洋学」はヨーロッパの近代そのものであると言ってよい。このような装置を移植して成立した日本の「東洋学」も、自らを「アジア」から区別し、「アジア」を外在化してきた日本の近代を映し出す鏡と言うべきである。第二次大戦後の「東洋学」は、「古典」の「学術的研究」に局所化することによって、自らの体系に潜むそうした排他性を覆い隠してきた。しかしながら、東洋学には 21 世紀を生きる私たちが参照すべき多文化主義に関する考察を含むものである。本研究は、東洋学の前者のような排他性を見据えながら、これまでの研究史上の問題点を克服し、後者の多文化主義を再発見することを通じて、21 世紀に相応しいアジア学を展望しようとした。

本研究を通じて、言語や文化間の相違を超えた対話による変革を追求するに当たって、多文化共生の重要性が強調される現代世界に対して、政治や経済の体制変革以外の有効な事例を、過去の文化遺産の中から見出すことができたのではないだろうか。

近世ユーラシアにおける威信言語の数々は、現代の英語グローバリズムとはかなり異なる共生の作法を有していた。このような威信言語の展開を扱う本研究は、威信言語が有する複数文化の摩擦を調停する契機を再発見することによって、現代の言語グローバリズムがはらんでいる権力性や強制力の在りかを明らかにする重要な契機となるだろう。そうした威信言語を研究の対象としたかつての東洋学の体系は、国民国家の枠を越えた多元性を考察するある種の「普遍性」を備えていたのである。このような東洋学の側面を再発見することは、言語が取り結ぶトランス・ナショナルな統合を追求するうえで、21 世紀においても東洋学がなお有効な営みであることを明らかにしてくれるはず

²⁸ [デーク 2007: 426]

である。

なお、最初にも記した通り、本研究は、ミッション活動が果たした東洋諸言語にかかわる学術研究が、どのように「東洋学」という学域の形成をもたらしたかに関する基礎資料（資料記事目録・文献目録）を整備することを目指している。引き続き、この目標に向かって研究を推進してゆきたい。

【資料調査・収集について】

本研究は、研究代表者・共同研究者が所属する神戸大学の諸資料や、近隣の諸研究機関・図書館が所蔵する関連資料を収集した他に、次のような調査を試みた。

- ・2013年9月9日-10日, 14日: ロンドン British Library: Eutychius の歴史書 (Ar. Christ. 32)、ヨーロッパで出版された最も古いアラビア語史書のひとつ Ibn 'Arabshāh (1389-1450) のティムール伝の写本 (Add. 24049) などアラビア語写本を調査した。
〔伊藤隆郎〕
- ・2013年9月10日-14日: オクスフォード Bodleian Library: Eutychius の歴史書 (Arch. Seld. A. 74) をはじめ Selden Collection の諸写本、Ibn 'Arabshāh のティムール伝の写本 (Laud Or. 148) などのアラビア語写本を調査した。〔伊藤隆郎〕
- ・2013年12月12日: 公益財団法人東洋文庫ライブラリーにおいて、中国大陸・台湾・香港におけるミッション関連図書目録を調査し、東アジアにおけるミッション関連雑誌・書籍の所在を確認すると共に、Max Müller, K.S. Latourette, Rev. Arther E. Moule などの中国（インド）ミッションに関する著作を調査した。〔緒形康〕

また、下記の参考文献の多くのほか、オリエンタリズム研究に関する文献を購入または複写して入手した。

【謝辞】

以上の研究成果、資料調査・収集は、いずれも公益財団法人 JFE21 世紀財団 2012 年度アジア歴史研究助成によって得られたものである。ここに付記して、謹んで感謝の意を表したい。また、本研究を通じて整備した基礎資料（資料記事目録・文献目録）については、完成次第、貴財団に謹んで献呈させて頂きたい。

【参考文献】

〈印欧諸語文献〉

AN 1877-86: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. M. A. Aḥmad & M. 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, III, 27.

- Augustin de Backer & Carlos Sommervogel 1890-1932: *Bibliothèque de la compagnie de Jesus*, Bruxelles.
- Peter R. Bachmann 1972: *Roberto Nobili 1577-1656, ein Missionsgeschichtlicher Beitrag zum Christlichen Dialog mit Hinduismus*, Roma.
- Charles Ralph Boxer 1949: 'More about the Marsden manuscripts in the British Museum', *Journal of the Royal Asiatic Society*, pp. 63-86.
- C. R. Boxer 1956 : 'A tentative check-list of Indo-Portuguese imprints, 1556-1674', *Boletim do Instituto Vasco da Gama*, 73.
- C. R. Boxer 1975: 'A tentative check-list of Indo-Portuguese imprints, 1556-1674', *Arquivos do Centro Cultural Portugues*, 9, pp. 567-599.
- C. R. Boxer 1981 : *João de Barros: Portuguese humanist and historian of Asia*, New Delhi.
- Michael Breydy 1985: *Das Annalenwerk des Eutychios von Alexandrien*, 2 vols., Leuven: E. Peeters.
- Louis Cheikho (ed.) 1906-09: *Eutychii Patriarchae Alexandrini Annales*, 2 vols., Beirut: E Typographeo Cagholico.
- Pedro Moura Calvalho 2012: *Mir'āt al-quds (Mirror of Holiness): A life of Christ for Emperor Akbar*, Leiden / Boston.
- Arnulf Camps 1957: *Jerome Xavier S.J. and the Muslims of the Mogul Empire*, Schöneck-Beckenried.
- Arnulf Camps & Jean-Claude Muller 1988: *The Sanskrit grammar and manuscripts of Father Heinrich Roth, S. J. (1620-1688)*, Leiden.
- Claudia von Collani 2011: "The Exchange of Knowledge between Europe and China by Missionaries", Ulrich van der Heyden/ Andreas Feldtkeller(Hg.) 2012: *Missionsgeschichte als Geschichte der Globalisierung von Wissen : transkulturelle Wissensaneignung und -vermittlung durch christliche Missionare in Afrika und Asien im 17., 18. und 19. Jahrhundert*, Stuttgart: Franz Steiner.
- John Correia-Afonso 1980: *Letters from the Mughal court: The first Jesuit mission to Akbar (1580-1583)*, Bombay.
- Jean Deloche et al. (eds.) 1997 : *Voyage en Inde 1754-1762: Relation de voyage en préliminaire à la traduction du Zend-Avesta*, Paris.
- Jean-Pierre van Deth 2012: *Ernest Renan: simple chercheur de vérité*, Paris: Fayard.
- Nicholas Dew 2009: *Orientalism in Louis XIV's France*, Oxford/New York: Oxford University Press.

- DUC 1963: Maria Augusta Veiga e Sousa (ed.), *Documentação Ultramarina Portuguesa*, III, Lisboa, pp. 1-291.
- Pierre-Sylvain Filliozat 2011 : 'L'approche scientifique du Sanscrit et de la pensée indienne par Heinrich Roth, S. J. au XVIIIe siècle', P. S. Filliozat (ed.), *L'oeuvre scientifiques des missionnaires en Asie*, Paris, pp. 17-30.
- Guerreiro: Artur Viegas (ed.) 1930-1942: *Relação anual das coisas que fizeram os padres da Companhia de Jesus nas suas missões*, 3 vols., Coimbra.
- Roberto Gulbenkian 1980: 'The translation of the four Gospels into Persian', *Neue Zeitschrift für Missionswissenschaft*, 36; 37, pp. 186-218; 267-288; 35-57.
- Guzman: Luis de Guzman 1601: *Historia de las misiones que han hecho los religiosos de la Compañia de Jesus, para predicar el Sancto Evangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Japon*, Alcala.
- Hamilton, Alastair/ Richard, Francis 2004: *André du Ryer and Oriental Studies in Seventeenth-Century France*, Oxford/New York: Oxford University Press.
- J. A. H[amilton], 'Malcolm, Sir John', *Dictionary of National Biography*, p. 848b.
- Richard Hauschild 1972: 'Der Missionar P. Heinrich Roth aus Dillingen und die erste europäische Sanskrit Grammatik', *Sitzungsberichte der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig*, Philologisch-historische Klasse, 115/116, Berlin.
- Joaquim Heliodoró da Cunha Rivara 1857: *Grammatica da lingua Concani composta pelo Padre Thomaz Estevão e accrescentada por outros Padres da Companhia de Jesus. Segunda Impressão, correcta e annotada*, Nova Goa.
- Bernard Heyberger (ed.) 2010: *Orientalisme, science et controverse: Abraham Ecchellensis (1605-1664)*, Turnhout: Brepols Publishers.
- Keiko Ikegami 1999: *Barlaam and Josaphat : a transcription of MS Egerton 876 with notes, glossary, and comparative study of the Middle English and Japanese versions*, New York: AMS Press; AMS studies in the Middle Ages, 21
- Robert Irwin 2006: *For Lust of Knowing: The Orientalists and Their Enemies*, London: Allen Lane; Penguin Books 2007.
- Michael Kemper / Stephan Conermann (eds.) 2011: *The Heritage of Soviet Oriental Studies*, London/New York: Routledge.
- Jan Loop 2012: "Die Bedeutung arabischer Manuskripte in den konfessionellen Auseinandersetzungen des 17. Jahrhunderts: John Selden, Johann Heinrich Hottinger und Abraham Ecchellensis", *Zeitsprünge* 16-1/2, pp. 75-91.

- al-Maqrīzī: *al-Mawā'iz wal-i'tibār fī dhikr al-khiṭaṭ wal-āthār*, ed. Ayman Fu'ād Sayyid, 5 vols., London: al-Furqān Islamic Heritage Foundation 2002-04; 2 vols., Būlāq 1853-54.
- E. D. Maclagan 1932: *The Jesuits and the Great Mughals*, London.
- Suzanne L. Marchand 2009: *German Orientalism in the Age of Empire*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Toru Maruyama 1996: 'Selective bibliography concerning the Jesuit mission press in the sixteenth and seventeenth centuries' 『南山国文論集』 20, pp. 1-118.
- Toru Maruyama 2005: *Vocabulario da lingua Canarim feito pellos Padres da Companhia da Jesus que residem na Christandade de Salcete e novamente acrescentado com varios modos de fallar pello Padre Diogo Ribeiro da mesma Companhia* (平成 16 年度・平成 17 年度日本学術振興会・科学研究費補助金研究成果報告 (課題番号 16520264)).
- Achilles Meersman 1960: 'Notes on the study of Indian languages by the Franciscans', *Neue Zeitschrift für Missionswissenschaft*, 16, pp. 40-54.
- MLC 1914: *Mongolicae Legationis Commentarius*, H. Hosten (ed.), 'Jesuit letters and allied papers on Mogor, Tibet, Bengal and Burma, Part I: Mongolicae Legationis Commentarius', *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, 3-9, Calcutta, pp. 513-704; 清水廣一郎・池上岑夫訳『ムガル帝国誌・ヴィジヤナガル王国誌』岩波書店 1984.
- Stephen Neill 1984: *A history of Christianity in India : The beginnings to AD 1707*, Cambridge.
- Matteo NICOLINI-ZANI 2009: "Jesuit *Jingjiao*: The 'Appropriation' of Tang Christianity by Jesuit missionaries in the seventeenth century", *Hidden Treasures and Intercultural Encounters*, Dietmar W. Winkler and Li Tang (eds.), LIT, pp.225-239.
- C. H. Payne 1926: *Akbar and the Jesuits: An account of the Jesuit missions to the court of Akbar by Father Pierre du Jarric, S. J.*, London.
- C. H. Payne 1930: *Jahangir and the Jesuits*, London.
- W. R. Philipps & H. Beveridge (H. Hosten ed.) 1910: 'The Marsden MSS. in the British Museum', *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, New Series, 6, pp. 437-461.
- S. Ponnad, 'De Nobili, Roberto', Charles E. O'Neill & Joaquín M.a Domínguez (eds.) 2001: *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús: Biográfico-Temático*, II, Roma / Madrid, pp. 1057-1059
- Anant Kakba Priolkar 1958: *The printing press in India: its beginnings and early development*, Bombay.

- Mariano Saldanha 1945: *Doutrina Cristã em lingua Concani por Tomás Estêvão, S. J., impressa em Rachol (Goa) em 1622*, Lisboa.
- David Schimmelpenninck van der Oye 2010: *Russian Orientalism*, New Haven/London: Yale University Press.
- Henry Scholberg 1982: *Bibliography of Goa and the Portuguese in India*, New Delhi.
- B. S. Shastry & V. R. Navelkar (eds.) 1989: *Bibliography of Dr. Pissurlencar collection*, 2 vols., Bambolim.
- Daya de Silva 1987: *The Portuguese in Asia: An annotated bibliography of studies on Portuguese colonial history in Asia, 1498-c.1800*, Zug.
- Robert Streit 1928 : *Bibliotheca missionum*. Vierter Band. Asiatische Missionsliteratur 1245-1599, Aachen.
- Vera Tolz 2011: *Russia's Own Orient: The Politics of Identity and Oriental Studies in the Late Imperial and Early Soviet Periods*, Oxford/New York: Oxford University Press.
- Glen L. THOMPSON 2013, "How *Jingjiao* became Nestorian: Western perceptions and eastern realities", *From the Oxus River to the Chinese Shores*, Li Tang and Dietmar W.Winkler(eds.), LIT, pp.417-439.
- G. J. Toomer 2009: *John Selden: A Life in Scholarship*, Oxford/New York: Oxford University Press.
- J. Wicki 1975: 'Old Portuguese translation of Marathi literature in Goa: c. 1558-1560', *Indica*, 12-1, pp. 23-26.
- Ursula Wokoeck 2009: *German Orientalism: The Study of the Middle East and Islam from 1800 to 1945*, London/New York: Routledge.
- Ines G. Županov 1999: *Disputed mission: Jesuit experiments and Brahmanical knowledge in seventeenth-century India*, New Delhi.
- Ines G. Županov 2005: *Missionary tropics: The Catholic frontier in India (16th-17th centuries)*, Ann Arbor.

〈中国語文献〉

- 崔維孝 2007: 「明清時期方濟会与耶蘇会在華傳教客体对比研究」澳門理工学院中西文化研究所主編『文化与宗教的撞衝——紀念聖方濟各·沙勿略誕辰 500 週年國際學術研討會論文集』澳門理工学院, pp.11-134.
- 葛承雍 (編) 2009: 『景教遺珍——洛陽新出唐代景教經幢研究』文物出版社.

- 李爽学 2011:「翻訳・政治・教争:龍華民訳『聖若撒法始末』再探」単周堯編『東西方研究』上海古籍出版社、pp.139-164.
- 洛陽市第二文物工作隊 2009:「洛陽景教石經幢出土の調査」葛承雍(編)『景教遺珍——洛陽新出唐代景教石經幢研究』文物出版社、pp.165-171.
- 張淑琮 2007:「広雅書院の景教研究」張先清編『史料と視界——中文文献与中国基督教史研究』上海人民出版社、pp.315-330.
- 張淑琮 2008:「朱一新〈無邪堂答問〉中の洋教観」『學術研究』2008年第10期、pp.92-95.
- 張先清 2007:「明清之際西班牙多明我士黎玉範与中国礼儀之爭關係考述」『明清時期的中国与西班牙國際學術研討會・論文彙編 30/10/2007-2/11/2007』pp.115-126.
- 鄒振環 2011:『晚明漢文西學經典:編訳、詮釈、流伝与影響』復旦大学出版社.

〈日本語文献〉

- 上田敏 1985:「菩薩物語由来」上田敏全集刊行会責任編集『定本上田敏全集』第9巻、教育出版センター.
- 栄新江(高田時雄 訳) 2007:「唐代の仏・道二教から見た外道——景教徒」京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』、臨川書店、pp.427-445.
- 桑原隲蔵 1910:「大秦景教流行中国碑に就きて」『藝文』(のち「大秦景教流行中国碑に就いて」と改め『桑原隲蔵全集』1、岩波書店、1967、pp.386-409 に再録).
- 河野純徳訳 1994:『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』1 平凡社 p. 179.
- サイド、エドワード 1993:『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳)、平凡社(平凡社ライブラリー).
- 重松伸司 1979:「16-18世紀の南インドに関するイエズス会史料:フランス版イエズス会文書を中心に」名古屋大学文学部編『名古屋大学文学部三十周年記念論集』pp. 161-169.
- シンメルペンニク=ファン=デル=オイェ、デイヴィド 2013:『ロシアのオリエンタリズム』(浜由樹子訳)、成文社.
- マックス・デアク(古松崇志 訳) 2007:「瓦礫の山から神を掘る——景教文献と研究のイデオロギー」京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』臨川書店、pp.411-426.
- 礪波護 2010:「唐代長安の景教碑と洛陽の景教石經幢」大谷大学図書館・博物館報『書香』27、pp.7-12.
- 羽田正 1999:『勲爵士シャルダンの生涯:十七世紀のヨーロッパとイスラーム世界』、中央公論新社;『冒険商人シャルダン』講談社(講談社学術文庫)、2010.

福島邦道 1979: 『サントスの御作業翻字・研究編』 勉誠社.

フュック, ヨーハン 2002: 『アラブ・イスラム研究誌』 (井村行子訳) 法政大学出版局.

森部豊 2012: 「中国洛陽新出景教経幢の紹介と史的価値」 『東アジア文化交渉研究』 5, pp.351-357.

森安孝夫 1982: 「景教」 『オリエント史講座』 3, 学生社, pp.264-275.